

— 報 文 —

インタビュー番組における「言い換え」についての一考察

岩 中 貴 裕

Some Notes on Reformulations in a Talk Show

Takahiro IWANAKA

要 旨

自分の発話を柔軟に言い換えるという能力は我々がコミュニケーションを行う際に必要不可欠である。学習者のコミュニケーション能力を向上させるためには言い換えのメカニズムを明らかにしなくてはならない。本論文の目的は、母語話者が自然な発話場面でどのように言い換えを用いているかについて考察を加えることである。分析のための理論的枠組みとして関連性理論 (Relevance theory) を利用する。

キーワード：言い換え reformulation, 発話 utterance(s),  
関連性理論 Relevance theory

1. はじめに

我々はコミュニケーションを行う際に、「言い換え」を日常的に使用している。自分の意図した内容が十分に相手に伝わらずに「言い換え」をしなくてはならないことは、実際のコミュニケーションの場面ではよくあることである。言語資源の不足がより顕著になる外国語の場合には、「言い換え」に頼らなくてはならない場合が更に増加するであろう。必要に応じて臨機応変に「言い換え」を行うことができるということはコミュニケーションを円滑に行うために必要不可欠な能力であると言える。英語学習者のコミュニケーション能力を向上させるためには「言い換え」という操作を明らかにして、そこから得られた知見を何らかの形で教育場面へ還元しなくてはならない。これまでの「言い換え」研究の多くは「言い換え」を発話の際に用いられるコミュニケーション方略の一部として捉えている。その一例として Takatsuka (1996, 1999a) や Kitajima (1997) が挙げられる。基本的には、意図しているある表現 (語・句・節・文) が思い浮かばない場合は他にどのような「言い換え」が可能かという観点から研究がなされている。「言い換え」を言語資源の不足を補うための代用表現と捉えるという点で、これらの研究は一致していると言えるだろう。その一方で、自然な場面における「言い換え」

についての研究は、ほとんどなされていないのが実情である。これまでの研究によって語レベルの「言い換え」、あるいは学習英英辞典や学習文法書で扱われている「言い換え」の分析は既に行われており、「言い換え」がどのような操作なのかについてはある程度明らかにされている。例えば文レベルでの「言い換え」分析のプロトタイプとして高塚（1999b）が挙げられる。では今後の「言い換え」研究はどの方向へ向かっていくべきであろうか。「言い換え」研究の今後の方向性を考える上で、野村（2000:2-3）が参考になる。

言語活動の主体として、テキストの送り手と受け手とをつねに想定しておく必要がある。テキストをこのような方針で取り上げるとき、コミュニケーションの時間や場所を離れて抽象的に与えられた言語資料を対象にすることはできない。たとえば、辞書などの例文として、文や発話が列挙されているとき、それらを具体的な言語活動の所産として認定できない、ということである。そうではなく、言語活動の時間や場所を特定し、そこに参加者を想定することで言語表現をとらえることが求められる。（下線は著者）

抽象的に得られた言語資料ではなく、言語活動の場面を特定しそこから得られた「言い換え」の実例を分析の対象にしていくという研究方法が今後の研究の可能性として考えられる。本研究が目指しているのもこの方向である。本研究ではより自然な場面における「言い換え」のサンプルを収集するためにインタビュー番組をコーパス化し、そこからサンプルを収集した。「元の発話」から「言い換えられた発話」へと至る際にどのような操作が行われているのか、また「元の発話」と「言い換えられた発話」の間にどのような関係があるのかについて考察する。分析のための理論的枠組みとして、Sperber and Wilson（1986, 1995<sup>2</sup>）によって提唱された関連性理論（Relevance theory）を利用する。

## 2. 本研究の目的

先述のようにこれまでの「言い換え」研究は語レベルの「言い換え」を対象としたものが多い。文レベルであっても辞書のような抽象的な言語資料を分析の対象としている。この点を考慮して、本研究は下記の3点を目標とする。

- (1) 自然な場面で使用されている「言い換え」サンプルを収集するための手段を確立、提案する。
- (2) 文 (sentence(s)) ではなく発話 (utterance(s)) を分析の対象とし、自然な場面で用いられている「言い換え」(paraphrase) について考察を加える。
- (3) 何が原因で「言い換え」が行われているのかという観点から分類を試みる。

### 3. コーパス化する register の選定

#### 3.1. 本研究に使用する register が満たすべき条件

コーパスに基づく手法を利用して言語研究を行う際には、研究目的に応じた register を選定し、それをコーパス化することが求められる。本研究のために使用する register は次のような条件を満たさなければならない。

- (1) 話し言葉 (spoken language) であること
- (2) addressor(s) と addressee(s) が存在すること (interaction があること)
- (3) 時間的な制約があること (real time)
- (4) 複数話者の sample が入手できること

最初の3つの条件を満たす register として interview が考えられる (Biber 1988)。4つ目の条件を考慮して “Larry King Live” (Larry King を host とする CNN の interview 番組) をコーパス化することを決定した。

ここで interview 番組を選択したことについて補足説明をしておきたい。話し言葉の中では interview は formal な種類に入り、友人間の会話等と比べると complete sentence(s) が多い。また audience の理解を確認するために、interviewer と interviewee のあいだで通常の会話よりも頻繁に「言い換え」が用いられている。以上のような理由から本研究の目的に最も合った register であると判断した。

#### 3.2. 本研究のために作成したコーパス

西暦2000年に放送された “Larry King Live” をコーパス作成のために使用した。CNN のホームページから transcript をダウンロードした。総ファイル数は289ファイル、総語数 (token) は約2,400,000語である。

### 4. 関連性理論 (Relevance theory)

関連性理論 (Relevance theory) は、ことばによるコミュニケーション、つまり発話解釈においては encoding, decoding だけでなく聞き手による推論 (inference) が不可欠かつ大きな役割を果たすという立場をとる発話解釈のための理論である。提唱者である Sperber and Wilson (1986, 1995<sup>2</sup>) は次のように述べている。

We argue that this principle of relevance is essential to explaining human communication, and show how it is enough on its own to account for the interpretation of linguistic meaning and contextual factors in utterance interpretation. (Sperber

and Wilson 1995<sup>2</sup>: vi)

関連性理論 (Relevance theory) では、発話によって表意 (explicature) と推意 (implicature) という2つの意味が伝達されると考える。表意とは発話の意味表示に肉付けすることによって得られる意味のことである。これに対して推意とは発話そのものの発展ではなく推論によって派生される意味のことである。発話によって伝達される想定のうち表意ではないもの、つまり発話の言語的解釈から得られた論理形式を発展させたものではないもの (東森・吉村 2003:50) が推意である。ここで表意 (explicature) と推意 (implicature) の具体例をひとつ紹介しておきたい。

(1) A: How is Mary feeling after her first year at university?

B: She didn't get enough units and can't continue.

(2) a. Mary Jones didn't get enough university course units to qualify for second year study and, as a result, Mary cannot continue with university study. (表意)

b. Mary Jones is not feeling at all happy about this. (推意) (Carston 1988:105)

Aの“How is Mary feeling after her first year at University?”という発話に対してBは“*She didn't get enough units and can't continue.*”と答えている。このBの発話は(2a)のような表意 (explicature) と(2b)のような推意 (implicature) を伝達している。

では表意 (explicature) と推意 (implicature) がどのようにして得られるのかについてそのプロセスを説明したい。関連性理論では発話解釈は3つのレベルで行われると考える。そのプロセスを説明していく。

#### 4.1. 発話解釈の第1レベル：発話の論理形式 (発話が言語的解釈を受けたもの)

まず発話は聞き手の言語解析装置で解釈されて(3)のような論理形式を付与される。これが発話解釈の第一段階である。

(3) X (she) didn't get enough units and can't continue.

#### 4.2. 発話解釈の第2レベル：表意 (explicature)

発話解釈の第2レベルで表意 (explicature) が形成される。表意の形成のためには、言語的意味の解釈と「一義化」, 「飽和」, 「自由拡充」, 「アドホック概念形成」という4つの語用論的プロセスが利用される。このようなプロセスによって形成された表意 (explicature) が

(2a)である。それぞれのプロセスを説明していきたい。指示付与によって Mary Jones という人物が特定され、一義化によって“unit”には文脈に合ったふさわしい意味が与えられる。“enough”のあとには飽和によって“to qualify for second year study”が補充される。同様に“continue”のあとには“with university study”が補充される。前半部分と後半部分の関係を明確にするために自由拡充というプロセスによって“as a result”が補充される。このようにして表意 (explicature) が形成される。

#### 4.3. 発話解釈の第3レベル：推意 (implicature)

発話解釈の第3レベルで推意 (implicature) が形成される。聞き手は推論 (inference) を働かせることによって自分の問いかけの返事として適当な (2b) を得る。これによって先行する質問文との最適関連性が達成される。

#### 4.4. 「言い換え」を生じさせる要因

ここでなぜ「言い換え」が生じるのかについて確認しておきたい。元の発話が最適関連性 (optimal relevance) を達成できないため、言い換えることによって最適関連性を達成しようとしているからだと言うことができる (Blakemore 1993:101)。表意 (explicature)、あるいは推意 (implicature) のいずれかのレベルで問題が生じている、つまり最適関連性が得られないために言い換えが必要になる。Figure 1 は「言い換え」が求められるプロセスを図示したものである。

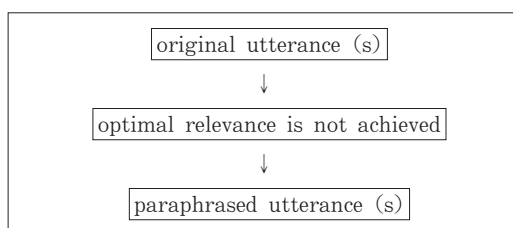


Figure 1. Paraphrase Model

「元の発話」と「言い換えられた発話」を分析・説明する際には意味と言語形式という2つの観点を考慮する必要がある。本研究では分析の対象とする意味に表意 (explicature) と推意 (implicature) の両方を含める。

## 5. 例文収集

例文収集のために addressor(s) と addressee(s) の間で最適関連性 (optimal relevance) が達成されない場合に使用されると考えられる語句を検索キーとして使用した。検索キーとして使用した語句は下記の通りである。

- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| 1. “what” と “mean” を含む  | 2. “Are you saying ~?” |
| 3. “Are you telling ~?” | 4. “that is”           |
| 5. “that means”         | 6. “which means”       |
| 7. “in other words”     | 8. “Pardon?”           |
| 9. “or”                 | 10. “So?”              |
| 11. “like”              |                        |

例文収集のためのソフトとして、WORDLab (English Corpus All-round Analyzer) を使用した。例文収集のプロセスは下記の通りである。

1. 決定したキーワードを用いて検索
2. ヒットした文とその前後にある文を収集
3. 検索によって収集したデータから「言い換え」の実例を収集 (目視)

## 6. 分析

先述のように「言い換え」は「元の発話」が最適関連性を達成することができない場合に生じる言語事象である。発話によって表意 (explicature) と推意 (implicature) が伝えられるのならば、そのいずれかのレベルで最適関連性が達成されなかったために「言い換え」が生じると考えることができる。「元の発話」のどこに問題点があったのかについて考える場合、表意レベルで問題がある場合、推意レベルで問題がある場合という2つのパターンが考えられる。

### 6.1. Semantic Paraphrase (Explicit Paraphrase)

表意レベルの問題を解決するために用いられる「言い換え」をSemantic Paraphrase (Explicit Paraphrase) と呼び、次のように定義する。

定義: 「言い換えられた発話 (paraphrased utterance(s))」が「元の発話 (original utterance(s))」によってコード化された論理形式を発展させることによって得られる場合 (意味論的意味関係 (synonymy・antonymy・opposition・entailment) を利用して得られる「言い換え」を含む)、この「言い換え」をSemantic Paraphrase (Explicit Paraphrase) と呼ぶ。

ではこのグループに入る「言い換え」のサンプルをいくつか紹介していく。

(1) A: This, by the way, is faux. Can you say “faux”?

B: **What’s faux mean?**

A: Not real. (20000128<sup>1)</sup>)

この例では“faux”という語が最適関連性を達成する妨げとなっている。ここでは“Not real (not+antonym)”という表現に置き換えることによって聞き手の理解を助けている。

(2) A: Totally, because I think that Walter is one of those people that is basically in some way a writer. **Do you know what I mean?**

B: Yes.

A: I mean, he has a way with words. (20000210)

この例では意味論的意味関係 (synonymy) を利用した「言い換え」が行われている。「元の発話」と「言い換えられた発話」はほぼ同じ意味を維持していると判断できる。「言い換え」の際に品詞を変えるという言語操作 (writer→words) が行われている。

(3) A: In fact, one of my clients is a very eminent psychiatrist actually in England. And the first time I had a session with him, I think I spent something like three hours with him, and afterwards he asked me, where did I train? I said, **what do you mean where did I train?** He said, which college did you go to? (20000315)

この例では“train”という語が最適関連性を達成するための妨げになっている。相手の理解を助けるために“train”という語が“which college did you go to”というより明確な (specific) 表現に置き換えられている。

(4) A: I look around, I’m surrounded by stunt people. I’m like, where’s my stunt -- well, Michael, you’re not that well-known now. I’m like, **what do you mean I’m not that well-known yet?**

B: You’re dispensable. (20000211)

この例では“not that well-known”が“dispensable”に置き換えられている。“well-known”と“dispensable”は厳密には対義語ではないが「not+antonym」の使用とみなすことが可能である。

(5) A: What I found out is how little I know about love. That's what I found out.

B: **What do you mean?**

A: I found out how much I know about love, which was very little. I'm not sure quite how to do any of that except I know what not to do. (20000406)

この例では「元の発話」が伝える意味を分割し，“how little I know about love”という「元の発話」を“how much I know about love, which was very little”というように複数の節を用いて「言い換え」をしている。

(6) A: Nothing's been said about the relatives or the grandparents on the mother's side of the kid and what -- I mean, all you hear is from the dad. (20000110)

この例では「元の発話」の論理的帰結 (entailment) が「言い換えられた発話」になっていると考えられる。“mother”と“dad (father)”はお互いに対偶関係にある語である。「元の発話」が伝える「子供の母親側の親戚や祖父母についての情報が何も無い」という意味は「これまでの情報はすべて父方のものだけだ」という「言い換えられた発話」が伝える意味内容を必然的に伝えている。

ここで紹介した例は収集したサンプルのごく一部であるが、Semantic Paraphrase (Explicit Paraphrase) の具体例である。

## 6.2. Inferential Paraphrase (Implicit Paraphrase)

推意レベルで生じた問題を解決するために用いられる「言い換え」をInferential Paraphrase (Implicit Paraphrase) と呼び、次のように定義する。

定義：「言い換えられた発話 (paraphrased utterance(s))」が「元の発話 (original utterance(s))」によってコード化された情報から推論 (inference) される可能性のひとつになっている場合、この「言い換え」をInferential Paraphrase (Implicit Paraphrase) と呼ぶ。

ではここで、推論 (inference) と推意 (implicature) について確認しておきたい。推論 (inference) とは与えられた情報を超えた判断 (Eysenck 1990:215-218) のことである。実際のコミュニケーションにおいては、我々はしばしば相手の発話に基づいて何らかの推論 (inference) を働かせている。推論 (inference) はコミュニケーションを成立させる上で必要不可欠な能力である。



では次に推意 (implicature) について説明をする。推意 (implicature) には前提推意 (implicated premise) と帰結推意 (implicated conclusion) のふたつがある。前提推意 (implicated premise) とは推論の前提として使われる推意のことであり、帰結推意 (implicated conclusion) とは推論の帰結として引き出される推意のことである。Sperber and Wilson (1995<sup>2</sup>: 195) はすべての推意 (implicature) は前提推意 (implicated premise) か帰結推意 (implicated conclusion) のいずれかであると主張している。この主張にしたがって以下、分析を行う。その前にまず、推意 (implicature) が得られるプロセスについて、(1) の Peter と Mary の会話を利用して具体的に確認しておく。

(1) Peter: Would you drive a Mercedes?

Mary: I wouldn't drive ANY expensive car. (Sperber and Wilson 1995<sup>2</sup>: 194)

Mary の発話は Peter の質問に対する答えになっていないが、Peter は関連性のある解釈を得るために推論 (inference) を開始する。そのプロセスは次のように示すことができる。

(a) I (Mary) wouldn't drive ANY expensive car. (Maryの発話)

(b) A Mercedes is an expensive car. (記憶からの復元)

↓

(c) Mary wouldn't drive a Mercedes. (関連性を達成するために得られた解釈)

Mary の発話を解釈する際に、Peter の記憶の中から (b) A Mercedes is an expensive car. のような情報が呼び出される。Mary 自身の発話である (a) と、Peter の記憶から呼び出された (b) によって (c) Mary wouldn't drive a Mercedes. という解釈が得られる。(b) のように推論の前提として使われる推意を「前提推意」、(c) のように推論の帰結として引き出される推意を「帰結推意」と呼ぶ。つまり「相手の発話」と「前提推意」を相互作用させることによって「帰結推意」は得られる。ではこのプロセスがうまくいかない場合、つまり推意レベルで関連性が達成されない場合はどのような解決策が考えられるのだろうか。欠けている要素を補えば問題の解決は可能であると考えられる。つまり「言い換えられた発話」が欠如している要素を補う役割を担えば問題は解決する。具体的には「言い換えられた発話」が「元の発話」に対して前提もしくは帰結の役割を担うということである。帰結であるか前提であるかの判断が恣意的になるのを防ぐために判断基準を提示しておく。

(2) Mary wouldn't drive a Mercedes because Mary wouldn't drive ANY expensive car.

(帰結推意)

(Mary自身の発話)

- (3) Mary wouldn't drive a Mercedes because a Mercedes is an expensive car.  
 (帰結推意) (前提推意)
- (4) Mary wouldn't drive ANY expensive car so Mary wouldn't drive a Mercedes.  
 (Mary 自身の発話) (帰結推意)
- (5) A Mercedes is an expensive car so Mary wouldn't drive a Mercedes.  
 (前提推意) (帰結推意)

(2), (3), (4), (5) のように「帰結推意+because+発話」, 「帰結推意+because+前提推意」, 「発話+so+帰結推意」, 「前提推意+so+帰結推意」という枠組みに埋め込んだ際に、4文すべてが成立する。これを判断の基準として採用する。では具体的な例を見ていく。

- (6) A: Are you Christian? Are you born again?  
 B: I am -- born again? Sure, sure, I'm born again.  
 C: Don't answer, Duke.  
 A: **What do you mean “don't answer”?**  
 C: That is not a question...  
 A: **What do you mean “don't answer”?**  
 C: That is not a question a candidate should be answering.  
 A: We don't have the right to know that? (20000313)

この例では‘Don't answer’という発話は何を伝えようとしているのかをAは理解できていない。この発話の表意がわかっていないとは考えにくい。推意のレベルで関連性が達成されていないと考えるべきである。この会話中に出てくる3つの発話を、前述の基準を利用して確認してみる。なお人称代名詞は必要に応じて修正を加える。

- (7) Don't answer because that is not a question a candidate should be answering.  
 (8) Don't answer because they (we) don't have the right to know that.  
 (9) That is not a question a candidate should be answering so don't answer.  
 (10) They (we) don't have the right to know that so don't answer.

3つの発話の組み合わせを検討してみたが、問題なく成立するのは“Don't answer”を帰結として考えた場合だけである。つまりこの会話では前提を示すこと無しに“Don't answer”という帰結部分だけが言語化されてしまったために関連性を達成することができなかった、関連性を達成するために「言い換え」によって前提部分を補っていると分析することができる。3

つの発話の関係は次のように表すことができる。

前提として機能：We don't have the right to know that.

That is not a question a candidate should be answering.

帰結として機能：Don't answer.

この例では前提部分を構成する2つの要素（発話と前提推意）と帰結部分（帰結推意）が3つとも言語化されているが、このような例は稀である。通常は3つの要素のうちの2つが言語化された時点で関連性は達成されている。以下、他の例をいくつか見ていく。

(11) A: Barry or Dexter, do either of you think this is going to end Saturday?

B: **What do you mean “end”?**

A: End -- we will know the next president Saturday night.

B: No, I don't think so. (20001116)

この例では関連性を達成する障害となっているのは“end”であるが“this is going to end Saturday”を「元の発話」として、“we will know the next president Saturday night”を「言い換えられた発話」として扱う。まず他の例と同じ分析を試みしてみる。

(12) We will know the next president Saturday night because this is going to end Saturday.

(13) This is going to end Saturday so we will know the next president Saturday night

基本的に“we will know the next president Saturday night”が「帰結」として機能し、“this is going to end Saturday”が「前提」として機能していると考えて問題ない。しかしこの例については「帰結+because+前提」, 「前提+so+帰結」という枠組みよりも「if+前提, then+帰結」という枠組みを使用したほうが適切であると考えられる。

(14) If this is going to end Saturday, then we will know the next president Saturday night.

どの部分が前提でどの部分が帰結であるかを判断するための基準として「if A, then B」という枠組みも考慮に入れておく必要があるだろう。

(15) A: How'd you get it out of him so quick?

B: **What's that mean?**

A: I'm just saying, it's pretty amazing, you're alone with the guy for 10 seconds, and he gives it up. (20000412)

この例では2つの発話“How'd you get it out of him so quick?”, “it's pretty amazing, you're alone with the guy for 10 seconds, and he gives it up” の関係を明らかにするために「帰結+because+前提」, 「前提+so+帰結」という枠組みを使うことができない。しかし最初の発話を発話行為表現に埋め込むことによってどちらが前提でどちらが帰結であるのかを明らかにすることができる。

(16) I say “How'd you get it out of him so quick?” because it's pretty amazing, you're alone with the guy for 10 seconds, and he gives it up.

(17) It's pretty amazing, you're alone with the guy for 10 seconds, and he gives it up so I say “How'd you get it out of him so quick?”

“How'd you get it out of him so quick?” を発話行為表現に埋め込んだものが帰結として機能し “it's pretty amazing, you're alone with the guy for 10 seconds, and he gives it up” が前提として機能していることが確認できる。

以上が Inferential Paraphrase (Implicit Paraphrase) として分類しているものの具体例である。

## 7. 結 語

言語生成は、結局のところ、自分の言いたいことを自分の言語能力の範囲内で表現するために、どのように言語化すればよいのか、すなわち、どのように「言い換え」をすればよいのかを、常に考えるプロセスである（高塚 1999b: 1）。学習者のコミュニケーション能力を向上させるために、「言い換え」の基礎研究が必要であるということは疑いの余地が無い。冒頭で述べたようにこれまでの「言い換え」研究の中には辞書から得られた言語データを分析の対象としたものがある。例えば、Konishi (1994) は、英英辞書に収録されている単語の中から2000語を選び出し、その定義文をデータベース化し、定義の表現構造を分析している。ここから得られた分析結果が「言い換え」を指導する際に有用であることは疑いない。しかし抽象的に得られた言語資料を分析することによって得られた結果が、実際の言語使用をどれだけ反映しているのかについては疑問が残る。実際のコミュニケーションの中で、「言い換え」がどのように用いられているのかを明らかにしなくてはならないという動機から本研究は始まった。

例文の収集方法についてはひとつの方法を確立することができたと思うが問題点も多い。本稿では自然な発話場面で用いられる2種類の paraphrase について扱ったが収拾したサンプルがすべてこのどちらかに分類されたわけではない。未分類の例も数多く存在する。明らかになったことが具体的にどのような教育的示唆を与えるのかについても検討できていない。この点については稿を改めて扱いたい。

## 註

1) 2000年1月28日放送

## 参考文献

- Biber, Douglas. 1988. *Variation across speech and writing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Blakemore, Diane. 1993. 'The relevance of reformulations.' *Language and Literature* 2.2: 101-120.
- Blakemore, Diane. 1994. 'Echo questions: A pragmatic account.' *Lingua* 94: 197-211.
- Carston, Robin. 1988. 'Implicature, Explicature and Truth-Theoretical Semantics' in Kempson, R. (ed.) 1988: 155-181.
- Carston, Robin. 2000. 'Explicature and Semantics.' *UCL Working Papers in Linguistics* 12: 1-44.
- Ellis, R. 1999. *Learning a Second Language Through Interaction*. Amsterdam: John Benjamins.
- Eysenck, Michael W. (ed.) 1990. *THE BLACKWELL DICTIONARY OF COGNITIVE PSYCHOLOGY*. Oxford: Basil Blackwell, Inc. (野島久雄/重野純/半田智久 (訳) 『認知心理学事典』 新曜社)
- Gleitman, L.R. and H. Gleitman. 1970. *Phrase and Paraphrase: Some Innovative Uses of Language*. New York: W.W. Norton & Company.
- Goldberg, Ade E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press. (河上誓作/早瀬尚子/谷口和美/堀田優子 (訳) 『構文文法論 英語構文への認知的アプローチ』 研究社出版)
- 東森勲・吉村あき子. 2003. 『関連性理論の新展開』原口庄輔・中島平三・中村捷・河上誓作 (編) 英語学モノグラフシリーズ21 研究社
- Hase, Naoya. 1999. 'The Effect of Paraphrase in Teaching Reading.' *Kwansei Gakuin University Humanities Review* 4: 51-65.
- Hase, Naoya. 2000. 'An Empirical Study on the Effect of Paraphrase in Teaching Reading.' *Kwansei Gakuin University Humanities Review* 5:47-55.
- 今井邦彦. 2000. 「関連性理論とはどういう理論か」『英語青年』10: 2-6.
- 井上亜依・西澤緑. 2003/10/25. 「Have/Did/Do you ever ～構文の分析 - “Larry King Live” Corpus を対象にして」第22回英語コーパス学会発表資料
- 岩井千秋. 2000. 『第二言語使用におけるコミュニケーション方略』*Communication Strategies in the Use of second Language*. 溪水社
- Kempton, Ruth. (ed.) 1988. *Mental Representations: The Inference between Language and Reality*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Kitajima, R. 1997. 'Influence of learning context on learners' use of communication strategies.' *JALT Journal* 19.1: 7-23.
- Konishi, K. 1994. 'The systematic principles and their pedagogical implications underlying the use of paraphrase as a communication strategy based on an analysis of Longman Active Study Dictionary of English in terms of its word definitions.' 『中国地区英語教育学会研究紀要』 24: 67-73.
- Matsui, T. 1993. 'Bridging reference and the notions of 'topic' and 'focus'.' *Lingua* 90: 49-68.
- 野村真木夫. 2000. 『日本語のテクストー関係・効果・様相ー』 ひつじ書房
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986, 1995<sup>2</sup>. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Takatsuka, Shigenobu. 1996. 'Teaching Communication Strategies: A Lesson Aimed at Teaching Post-Modifying Structures for Paraphrase.' *Bulletin of the Faculty of Education, Okayama University* 102:165-184.
- Takatsuka, Shigenobu. 1999a. 'Teaching Paraphrase as a Communication Strategy: A Critical Review and a Proposal.' *Annual Review of English Language Education in Japan* 10: 21-30.
- 高塚成信. 1999b. 「コミュニケーション方略としての『言い換え』ーその指導内容と方法に関する基礎的研究」 『岡山大学教育学部研究集録』 110:1-12.
- 高塚成信. 2000. 『英語学習者のコミュニケーション方略使用の実態及び方略指導の内容と方法に関する研究』 平成9年度～平成11年度科学研究費補助金（基礎研究（C）（2）課題番号09680271）研究成果報告書
- 辻幸夫（編）. 2002. 『認知言語学キーワード事典』 研究社
- Varonis, E. M. and S. Gass. 1985. 'Non-native/Non-native conversations: A Model for Negotiation of Meaning.' *Applied Linguistics* Vol. 6:71-90.